袾宏重訂『水陸儀軌』における浄土思想

研究生　石上　壽應

本発表では、袾宏重訂『水陸儀軌』において付加された念仏観が、後代どのように波及し、影響を及ぼしたのか、その事例を確認し、また袾宏がどのような意図をもって水陸会に念仏を用いたのかについて考察した。

袾宏が水陸会において持名念仏を推奨したことにより、確かに水陸会での念仏による往生が説かれる記事が見られ、袾宏以前の水陸会では「普度」として扱われていた救済の道が、「往生浄土」へと転化していったことが確認できた。これらの記事は儀潤『水陸儀軌会本』が成立した道光年間よりも以前の記事にも見られ、「普度」から「往生浄土」への転化は袾宏を契機としたものであると言える。また袾宏の影響下で作られた『会本』には、袾宏儀軌にはなかった往生の回向文や念仏回向、『阿弥陀経』読誦が付加されており、後代になるにつれ、水陸会に深く浄土教が関係してくることが窺える。しかし水陸会における往生の功徳が記される記事は往生伝などにしか見えず、非常に偏った史料にしか残されていない点は注意が必要であろう。

そこで水陸会における持名念仏の契機となった袾宏の念仏観を主著『阿弥陀経疏鈔』も踏まえて再検討した。『水陸儀軌』末尾によれば、念仏には持名・観像・観想・実相、四種の念仏があるとし、その究竟は実相念仏であると規定している。そして残りの三種については、観像・観想を『観経』所説の観想念仏、持名を『阿弥陀経』所説の念仏とし、易行である持名念仏の功徳を宣揚することこそ、往生浄土の要となるのであると説いている。

袾宏は四種の念仏の中で、実相を最上位の概念として設定しているものの、持名による易行の念仏による往生も認めている。これは『阿弥陀経疏鈔』においても同様に説かれており、持名は初門ではあるが、その実は無尽を含むものであると、その功徳を大いに賞賛している。そして四種念仏において、持名を事の一心、実相を理の一心とし、事理相即を提唱するのである。

一方で袾宏は事に執着して念念相続することで、往生の功徳はあるが、理に執着して心実明らかにならなければ、かえって落空の禍を受けるとしており、事への執着よりも、理への執着の方が悪質であると考えているのである。もちろん教学上は理つまり実相を上位概念とするものの、そこに到達できうる者はほとんどいないであろうという機根観に基づき、一般の信者、民衆にも実践しうる持名・称名の念仏を強く押し出しておく必要性があったのだろう。

『水陸儀軌』末尾において実相念仏よりも持名念仏について詳細に記述されるのも、このような事情から、持名による往生の功徳を示しているものと考えられる。